

子どもと共なる日々

高橋洋代

木曜日、午前六時起床、子どもたち（長男六歳、次男三歳）はまだ眠っている。そうっと着換えをすまずと階下へ降り、ストーブに火をつける。さて、七時三十分までにすべてを終えなければ、ごはん炊き、おべんとう作り、夫と子どもたちの朝食を用意し、自分の朝食をすませ、留守中のメモを記す。そろそろ時計は七時をまわっている。子どもたちを起

こしにいく、昨夜、会議でおそくなった私の帰りを待って寝たのでまだ目を覚まさない。時間はせまる。つい「おめざがあるわよ」「さあ着換えを手伝ってあげるから……」「どっちが早起きかな？」などのセリフがとび出す。子どもたちがやっと起き上ったのが七時十五分。家を出るまでにあと十五分しかない。おどしが始まる、「早くしないとママ行っちゃうわよ」「ホラ、男の子でしようメソメソしないの」「ママ、電車に乗り遅れちゃうじゃないの」等々、長男の幼稚園登園のための用具を持ち、二人の朝食をそえて、となりの祖母のところへ子どもたちを連れていく。「じゃあ、ママ行ってき

ますね。オバアチャンのいうことをよくきくのよ」と言う。と、おきまりの儀式「チュッチュ」「握手」「おならチュッチュ（ホッペにプーッと息をふきかける）」をして、こちらもやっと晴々として家を出るわけである。

現在の私にとって、子どもと共なる日々は、ある面では戦いであるように思う。

結婚する以前から私は、子どものことばの問題の相談とか、幼稚園教諭の養成とか、保育にかかわる仕事を続けてきた。仕事で出会う子どもたちを、私は今だに一度もにくらしいとか、いやな子だとは思ったことはない。どの子も皆かわいく、それぞれ個性をもっていて、無限にやさしくすべき存在のように思っていた。そして今もそう思っている。しかし我が子というものは、どうしてこうも腹のたつものなのだろうか、長男がまだ、ほんの二、三か月の頃から、私は心の底から腹立たしい思いをもったことを憶えている。我が子というものは、四、六時中共に居て、私の眠くてたまらない時も

たたき起こすし、じつと本を読んでいくともじやまをするし、一日相手をしてやれば夜には私の方が疲れはてて、ともにダウン、という具合に、とつても困る存在なのだ。

私は生来、わがままで気が短く、待つことが不得手であり、睡眠、食事はともにタップリとらないとすぐイライラしてくる方である。わがままが顔を出さない「仕事上の時間」とちがいで、毎日の生活は「地の私」が行なっていることなのでイロイロと問題が生じるわけなのである。いつか長男が一歳の頃だったろうか、子育てとは知識・方法を問題とする以前に、「自分の生きざまを問われることである」とつくづく思ったことがある。

人間は肉体をもっているが故に、肉の願いと精神の願いがぶつかる。肉の願いははてしなく、快楽、安逸、美食などへと向かう。寒い朝は暖かい寝床にいつまでもまどろんでいたし、好きなもの、おいしいものはお腹いっぱい食べたいし、いやなこと、めんどろなことはしたくない。好きなことだけしていたい……。言い出せばきりがなが、このような欲望のままに生きられたらどんなに幸せだろうと思うこともある。しかしこの自由そのもののように思われることが曲者なのだ。「自由とは選択する能力である」という定義に従え

ば、このような状態は、自己の欲望の奴隷であり、「いっそう高い価値の善を選ぶ」自由は放棄していることになる。精神的にも満足は得られないであろうし、結局は肉体をも滅ぼすことになろう。

しかしながら、基本的には、このような欲望をもった、人間たちが一つの社会を作っているわけだし、夫も私も、また子どもたちも、その同じ人間なのだ。そこで、社会を形造っていく上での人間たちの教育 education の必要性が生まれるわけであろう。

education とは、P・フルキエによれば、「……から外に出させる」という意味であり、次のような三つの解釈が成り立つという。

- 一、動物的な状態からよりよい状態に導くこと
- 二、子どものうちに隠され、埋もれていた富を外に出させること
- 三、自分から外に出させ他の人に注意するようになること

これらの定義から考えれば、子どもを育て教育していく為には、私自身「よりよい状態」とは何かをしっかりとらえていなければならないことになる。私の考える「よりよい状

態」とは何だろうか。私自身はどのような理想に向って生きていこうとしているのだろうか。そしてその理想を子どもの中に育てる為にはどのような育て方をしようとしているのだろうか。

たとえば、真、善、美、を愛する人になりたいという理想を抱いていたとする。真なることを愛する為にはまず謙虚で誠実でなければならぬし、まず自己を知らねばならない。嘘つきであってはならない。

善きこととは、人へのやさしさ、共感する心、勇氣、強い意志、一貫したその人らしさ、向上心など、数限りなくあげることができる。

美しきことを愛するには、まず、美しさに共感する心がなければならぬ。そして美への愛は高次の美を求めていくにちがいない。

それらの真、善、美を愛そうとする熱い願いと実際に愛する意志と行動力を私自身の中に育てることによって、はじめて「導く」ための、「子どものうちに隠され、埋もれていた富を外に出させる」ための、基礎的な部分が用意されたことになろうし、「自分から外に出させ、他の人に注意するよう」に「導くこと、即ち、「他人についての感覚を教えること」

もできるようになるのだと思う。その後初めて、子どもの中にそれらを現実に育てる為の「方法」が考えられ得るのではないだろうか。「子どもの気持を尊重する」という児童学的立場はこの時初めて生かされてくるのではないかと思う。

ある夕方のことである。私は夕食の仕度をしていた。子どもたちは何やら夢中で遊んでいる様子である。そのうち、夕焼け小焼けのメロディーにあわせて大きなダンボール箱に何かを乱暴に入れはじめた。私は「あー多分ゴミやさんだな、ノッテルな」と思いながら夕食の仕度を続けていた。ところが二十分程して、近くに来たそのゴミやさんのダンボールの中をのぞいて驚いた。折紙、新聞、クレヨン、レゴ、おはじき、つみ木、自動車、ねん土、とにかく、ありとあらゆるものがゴチャゴチャにつめこまれうず高く盛り上っている。何ということだ。私はどなった。「もう夕食はできたというのに、これを全部、分類してかたづけなさい！」

常々、めんどうくさがりやで、お片づけは大部分母親の仕事ときめこんでいる子どもたちにとっては、ここがしつけのしどころ、という理性の声もかすかにしたが、それよりもメチャクチャに詰め込まれた「物たち」を見て、むしろように腹が立った為である。かくして私は、「早くしなさい！」「ママ

は手伝いませぬ」と何度かとなり、子どもたちは片づけるプロセスもまた遊びにしたようだったが、ともかく一時間程かかって、元どおり片づけた。

冷静になって考える。「ちょっとかわいそうだったな、あんなに怒鳴らなくてもよかったかも」ゴミやさんになりきって楽しんでる子どもの想像性、創造性、そして、自発性、これらは尊重しなければならぬ。しかし自分たちが遊んだ後のおもちゃを片づけることも社会の一員となる上に必要な義務である。そしてその義務もまた愛する人間にしないでならない。母親に怒鳴られるのがこわくてゴミや遊びはもう二度としない、というならまだですが、我を忘れて遊びの中に没頭することをやめてしまったらこまる。自発性は子どもが発達・教育の源動力だ。また、遊んだら片づけるという義務は、美しい環境を愛することであり、共に楽しい時をすごした「物」への愛を育てることもある。怒鳴られ、怒られながら片づけることによってそういう義務は苦痛なものだという印象しか残らなかつたら、そしてそういう毎日を積み重ねていったら私は子どもたちの中に何を育てていることになるのだろうか。

片づけを少し手伝ってやってから、「二人でこんなにきれいに片づけてえらかったね」とほめたものの、「これでいいか」という疑問が頭から去らない。子どもたちはサッパリした顔をしているのだけれど……。

入学前の知能テストを「血のテスト」だと思いこみ、「この血をとるの？」とこわごわたずねた長男、かやぶき屋根を見つけて、「あ、お庭のおやねだ」と歓声をあげた次男。彼らとの共なる日々は、毎日楽しく過ぎていくが、さて、日々の生活を通して、彼らの中に何を育てているのかということになると、まるで雲をつかむようで、心もとない限りである。

個人のうちに人間の理想をうえつけ、理想への熱い願いを育てることは、どのようにしたら可能なか。子どもと共なる日々の中で時々頭をもたげてくるこの間は、わがままで気が短く怒りっぽい私にとっては依然として非常にむずかしい間である。

※P・フルキエ著 久重忠夫訳『公民の倫理』筑摩書房一九

七七年